

調査研究「『書くこと』を中心にした言語活動」

- 中学校・高校国語科における学力向上のための授業改善 -

## 実践編 事例 「視写」

長崎県教育センター 高校教育研修課  
指導主事 畑野公昭

### 「視写」指導の実際

「板書を書き写すのが遅い」「ノートをとるのに時間がかかる」といった生徒の「筆速」に問題を感じている教員は多い。「筆速」の遅い生徒を待っていると授業が間延びしたり、見切り発車をして授業を進めるとノートを取り終わっていない生徒が授業内容を聞いていなかったりする。また、時間をかけて丁寧に書いている生徒が十分な理解をしているわけではない。むしろ逆の場合がよく見受けられる。

このような状況を憂えている教員は多いが、その改善のための具体的な手立てがなかなか見つからないのが実情である。そこで本教育センターでは、平成22年度からの「調査研究」の中で「視写」による「書くこと」のトレーニングを紹介している。個々の生徒の「筆速」を上げると同時に生徒間の差を縮めることは、授業改善の面から様々な可能性が期待できる。

「視写」に取り組む上での理論的な考え方やこれまでの実践例については、本教育センターホームページで公開しているので、ぜひ参照していただきたい。平成23年度は、実践例を収集し、理論や具体的な効果の検証を行った。結果を分析すると「視写」が国語の学力向上に大きな効果を上げることが認められた。いずれも高等学校の実践例であるが、中学校や特別支援学校でも活用できると考えられる。

実践例 については、高校3年での取組で、帯单元にかかる時間の一定化を図る必要性が高かったため、時間を区切った取組となった。実践編の基礎 で提案した「決まった字数の文章の視写」は、実践例 で取り上げた。

### 実践例 : 決まった時間内での文章の視写

#### 1 実践校及び実践報告者

長崎県立対馬高等学校 御塚 信一郎 教諭

#### 2 実践の内容

現代文の授業(50分)の冒頭5分間で新聞のコラム(朝日新聞「天声人語」)を視写する。

5分間で書けた「文字数」を記録

・実施時期	平成23年 6月～10月
・実施学級・生徒数	3年1組・2組(普通科) 計76名
・実施回数	3年1組(理系クラス) 10回
	3年2組(文系クラス) 20回

### 3 実践の目標

#### ア 書くことについて

書くことへの抵抗感を減らす。

「漢字」を書く力を高める。

文章表現力を高める。(課題文を例文として頭にストックしていく。)

書く速度を上げる。

文字を丁寧に書く態度を育成する。

#### イ 読むことについて

読解力(内容を理解する力)を育成する。

読解の速さを上げる。

集中力を高める。

語彙力を高める。

現代社会についての背景知識を増やす。

### 4 実践の方法

新聞のコラムを貼付した「視写プリント」を配布する。

教員の「始め」の合図で「視写」を開始する。

途中で経過時間や残り時間を指示する。

教員の「やめ」の合図で終了する。

生徒は自分の書いた文字数を数えて、プリントに記入する。

コラムを再度読み直し、周囲の生徒と意見交換をする。

指名した生徒に意見や感想を発表させる。

(所要時間 約10分)

### 5 生徒の処理文字数の推移

結果を図1に示す。

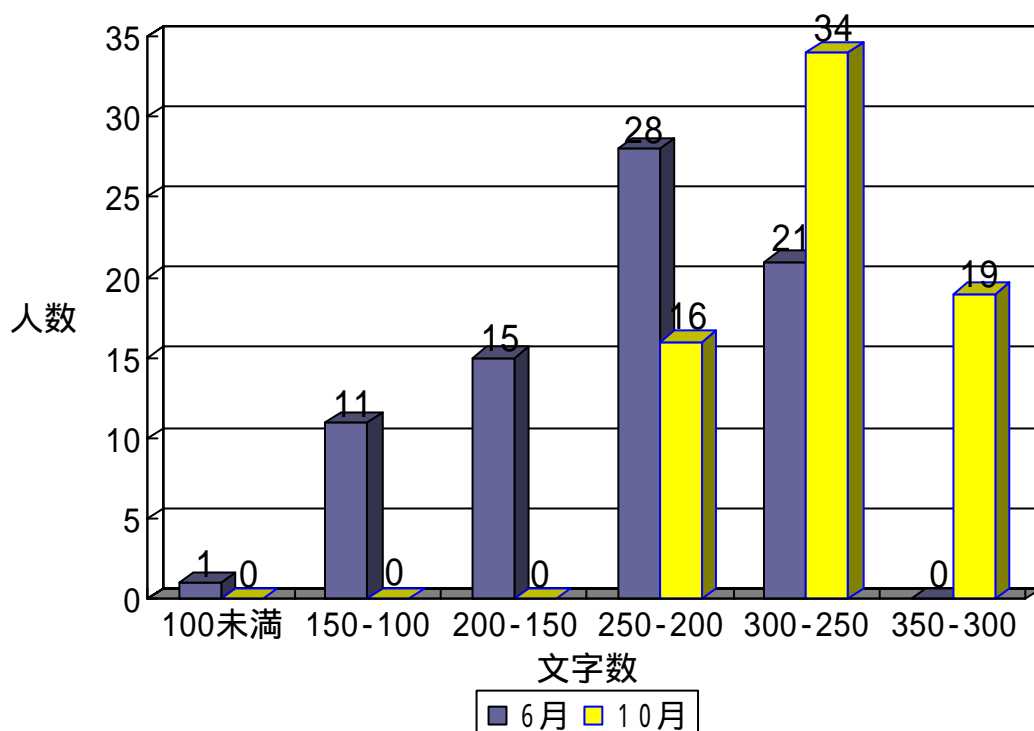


図1 生徒の処理文字数の推移

【分析】

6月は200～250文字の処理が最も多く、人数は28名(37%)であったが、10月は250～300文字の処理が最も多く、人数も34名(49%)に増加した。  
6月は300文字以上の処理ができる人数は0名であったが、10月は19名に増加した。  
6月は200文字未満の処理で終わっていた生徒が26名いたが、10月にはいなくなった。  
6月より10月の方が、書ける文字数の個人差が小さい。

生徒の視写のスピードが6月から10月にかけて大きく伸びていることが分かる。生徒によっては5分間で100字以上の伸びを見せている生徒もあり、トレーニングの成果は大きい。

6 生徒アンケートの結果(調査生徒数75名)

「視写」を行うことによる「書くこと」への意識の変化について	
ア 高まった	61%
イ 変わらない	39%
ウ 低くなった	0%

「視写」は「書く力」を高める上で役に立ったか。	
ア 役に立った	35%
イ ある程度役に立った	60%
ウ あまり役に立たなかった	5%
エ 役に立たなかった	0%

「視写」に取り組むことによる効果について(複数回答可)	
ア 「書く」速度が上がってきた	79%
イ 「漢字」を書く力がついてきた	16%
ウ 「語彙力」がついてきた	16%
エ 「ノート」と取る速度が上がってきた	47%
オ 「書くこと」への抵抗感が減ってきた	21%
カ 先生や級友の発言の「メモ」をよくとるようになった	13%
キ 作文などの「文章表現力」を高めることにつながった	7%
ク 「語彙力」の向上に伴い、文章への「理解力」が高まった	32%

生徒の主な感想(記述式)	
<ul style="list-style-type: none"> <li>・速く書けるようになりよかった。</li> <li>・自分の「書く」速度が上がるのが楽しかった。</li> <li>・「メモ」は前よりも確実に取るようになった。</li> <li>・ノートを速く取ることができるようになった。</li> <li>・速く読もうという意識が高まったし、読めるようになった。</li> </ul>	

- ・文をまとまりで読む力も身についた。
- ・読解力をつけるよい機会になった。
- ・速く読みながらも、文章の内容を理解しようと意識することができた。
- ・書きながら文を読む力や問題を把握する力を養うことができた。
- ・一回読んで頭に入る文が以前に比べて長くなった。
- ・文章の理解力は確実に高まった。
- ・世間のことを知るよい機会になった。
- ・勉強の効率が上がった。

## 7 御塚教諭の分析

当初、5分間で300字かける生徒はいなかったが、回を重ねるごとに**スピードがみるみるうちに上がった**。

10月の時点で、5分間200字未満の生徒はいなくなった。

5分間で200字を切る視写が遅い生徒は、「普段から書くことを厭う」「提出物の字が乱れている」「書いて学習することをしない」傾向があり、日常の学習に対するアドバイスにつなげることができた。

**読解力の向上が認められた。**

高校1年生など早い段階からスタートするべきである。

### 実践例 : 決まった字数の文章の視写

#### 1 実践校及び実践報告者

長崎県立諫早高等学校 高比良 周一 教諭

#### 2 実践の内容

「国語総合」の授業(45分)の冒頭で「うたの歳時記第3巻 秋の歌」大岡信(学習研究社)・「新 折々のうた」大岡信(岩波書店)の200~250字の文章を視写する。

視写にかかった「**時間**」を計測

・実施時期	平成23年10月~平成24年3月
・実施学級・生徒数	1年1組~7組(普通科・理数科) 計280名
・実施回数	20回

#### 3 実践の目標

「名文」の身体化

筆速の向上・「書くこと」への負担感の軽減

速読力の向上・内容理解の深化

授業開始時の「集中力」の向上

韻文に触れる機会の確保

「書くこと」における口語表現の濫用の軽減

#### 4 実践の方法

最初に「『視写』の心得」というプリント(図2参照)を配付し、方法や意義の周知を図った。実践方法は次のとおりである。

大岡信の文章を載せた「視写プリント」を配布する。

教員の合図で「視写」を開始する。(チャイム前配布、チャイム開始)

3分前後から10秒単位で時間を読み上げる。

「視写」が終わった生徒は文章を読み直し、感想を指定欄に2行以上記入する。

記入したものは各自で保管する。

10回ごとに振り返って反省と感想をまとめる。(所要時間 約7分)

指導の際、生徒に特に留意させたこと

ア 字を崩して(雑にして)筆速を上げるのではなくて、一度に目で見つかまえる文字数を増やすこと。(ただ目で追いながら写すのではなくて、多くの文節を記憶して書く)

イ 題材と同じレイアウトで改行するのではなくて、文節(せめて単語)で改行すること。

ウ 内容を理解しながら書くこと。

図2 「視写」の心得

## 5 生徒の主な感想

第10回が終了した時点での感想。自分の「書くこと」に変化があったか、「視写」という活動そのものについてどのように考えているかを記入するよう指示している。この日の題材は、視写の成果を実感しやすくするため、第1回で視写したものと同じものを使用した。

- ・1回目よりも文を読むときの集中度が上がって、書く動作もうまくいくようになった。
- ・一度に読み取る文字数が少しずつ増えたと思う。
- ・文の切れ目や文の意味を理解できるようになってきた。
- ・今まで単語のつながりに見えていたものが、意味のまとまりに見えてきた。
- ・黒板の字を写す時にも、「ぱっ」と見て字をたくさん書けるようになった。
- ・国語の予習はもちろん、英語の書き取りにも効果が実感できています。
- ・多いときは一文を一気に写せるようになったので、効果が目に見えてすごく嬉しい！
- ・書くのが速くなると同時に、いろいろな歌や言葉を知ることができて楽しいです。
- ・一生懸命書いた自分の字を見て、いかに自分の字が小さくて薄いか分かったので改善したい。
- ・書いていると手がすごく疲れるので、いかにペンの持ち方がよくないか実感した。

## 6 高比良教諭の分析

生徒の多くは視写の効果を実感していて、反応は良好である。

「書くこと」が「読むこと」と相互に影響して、効率を高めているのが分かる。

大岡氏の評を読んで自分の感想を書くため、詩や短歌に楽な姿勢で向き合っているようである。自らの文字やペンの持ち方など、生徒自身の「書く」という作業そのものへの反省も見られた。

### 「視写」の実践の検証

「視写」が生徒に働きかける力は大きい。対馬高校のアンケートの結果から、「視写」による「書くこと」への意識が「高まった」とする生徒は6割と半数を超えた。「視写」は、多くの生徒の「書くこと」への自覚や意欲、興味や関心などを喚起したといえる。また、「視写」が「書く力」を身に付ける上で「役に立った」「ある程度役に立った」と答えた生徒は9割を超え、ほとんどの生徒が「視写」の効果を実感している。具体的な効果として、8割の生徒が「書く」速度の上昇を挙げ、次に「ノート」をとる速度の上昇、文章への「理解力」の向上と続いた。

特に「視写」が「読解力」の深化に大きく影響していることが注目される。「読解力」に関する内容は、両校の生徒の感想にも多く見受けられ、実践報告者の分析でも指摘されている。「読解力」の深化は、書写の速度を上げることによって、言葉を「塊」でとらえる力や文章全体を一つの「まとまり」として見渡す力がついてきた結果だと考えられる。これは、青木幹勇氏が「第三の書く」（国土社）の中で「視写」のメリットの一つとして挙げた「文章理解の道を開いてくれる」とことと符合する。

「視写」は、トレーニング性が大きい取組であるが、二つの実践の共通点は、いずれも書写のみで終わらせず、素材の内容について話し合わせたり感想を書かせたりして、単なる能力開発のためのトレーニングに限定していない点にある。生徒の感想にも「世間のことを知るよい機会になった」「いろいろな歌や言葉を知ることができて楽しい」などがあり、素材文そのものの理解と主体的な意見や感想を求め取組が、実践をより意義深いものになっている。

「視写」は、他の幾つかの学校でも実践されている。長崎県立奈留高等学校の種川彰子教諭は、高校1年生で「決まった字数の文章の視写」を40回実施し、生徒が書き取る200字当たりの平均時間が1分30秒ほど短縮されたという報告を寄せた。トレーニング後には、語彙力の定着のため未知の語を書き出し、必要に応じて辞書を引くなどの取組を加え、その結果、生徒が辞書を日常的に引く姿勢が見られるようになったということである。また、段階に応じて「文字の練習」「ねじれない文の体得」「作文力の向上」「語彙力の向上」「時事問題への関心の喚起」などの目標を持って取り組むよう生徒に指示を出すといった工夫も注目される。「時間を計る」というゲーム的な要素から生徒が取り組みやすかったことや「集中力」の向上などについても指摘があった。効果については、先の2校の取組とも重なる。

以上のことを総合すると、「視写」の取組による効果は大きく、かつ広範囲に及ぶ。「筆速」の飛躍的な向上に伴い、「ノートをとる速度」や「集中力」の向上といった学習能力そのもの効率化が図られ、同時に「読解力」の深化がもたらされる。これは「学力向上」に直結することを意味する（図3参照）。

ただ、実践報告者からは、「視写」の時間をいかに継続的に確保するかが課題として挙げられている。取り扱う素材の長さや内容、トレーニング後の取組など、目的や時期に応じてメリハリをつけるような計画が必要であろう。また、「視写」が一定の速度で停滞

した時のマンネリ化への懸念も挙げられた。高比良教諭は、その際に「速度の向上」から「読み味わう」ことに重点を移行することを提案している。

実践報告者や取り組んだ生徒からは、「視写」にもっと早期に取り組む必要性も指摘された。中学校・高校では「視写」の有効性に対する認識を深め、「視写」に対する積極的な取組が望まれる。

### 「視写」に取り組む上での視点

「視写」は、目的に応じて二つの視点がある。一つは「文字や文章を丁寧に書き写すことで、言葉や文章へのイメージ力を高め、言葉の存在を実感する」という視点である。小学校の低学年では、教員が黒板に書写した文字や文章を児童が見てノートに丁寧に写し取っていく作業はごく日常的な取組である。もう一つは「文字や文章をできるだけ速く書き写すことで、情報を素早く取得する技術を身に付けるとともに、言葉や文章をかたまりでとらえ、語句や文章の理解力を高める」という視点である。だが、後者の取組については、前者の次のステップとしての計画的・組織的な実践は十分ではない。中学校・高校では、この点についての問題意識を持ち、「書くこと」の基盤となる力を高める取組を進めることが重要である。後者の視点を基本に据えた「視写」の取組は、中学校・高校における生徒の学力向上を支えるための基礎づくりに重要な役割を果たすだろう。ただし、後者の視点は前者の視点の上に立脚した取組であり、指導する際には前者の視点への意識を下地に置かせることが大切である。

また、今回の「調査研究」を通して、生徒の学習能力の格差は、実は「書くこと」のトレーニング不

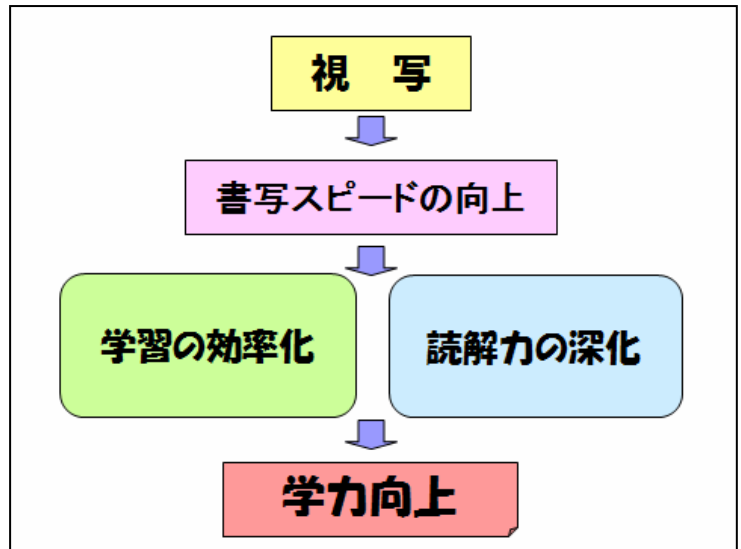


図3 視写の効果

足がその責任の一端を負っているのではないかという課題が明らかになった。「視写」による書写スピードの向上と均質化は、まず学習に遅れがちな生徒の学力の底上げを図ることにつながる。さらに板書をノートに書き取る時間が短縮されることにより、授業内容を深める時間が確保され、個々に配慮した指導や丁寧な説明等に時間を割くことができるようになる。そのような授業改善が図られることで生徒の学習目標に対する到達度は上がり、生徒間の学力差が是正されることにつながる。「視写」への取組に際しては、この生徒一人一人の「学力向上」と「授業改善」がサイクルとして結合しているという視点を持つことが必要である。

青木幹勇氏は「第三の書く」の中で、「視写」をする際、一文ごとに改行することを勧めている。一文を明確化することは、「センテンス」「キーワード」「文の長短」「文章の展開」「主述の照応」「重文・複文」「文末表現」「文と文の関係」などに着目する機会となり、同時にそれをそのまま教材として利用できるというメリットを挙げている。この方法は、トレーニングを終えた生徒に、文の「書き方」を指導する場合に活用することができるだろう。「視写」を「書き方指導」の一環として捉えることも視点の一つとして挙げることもできる。

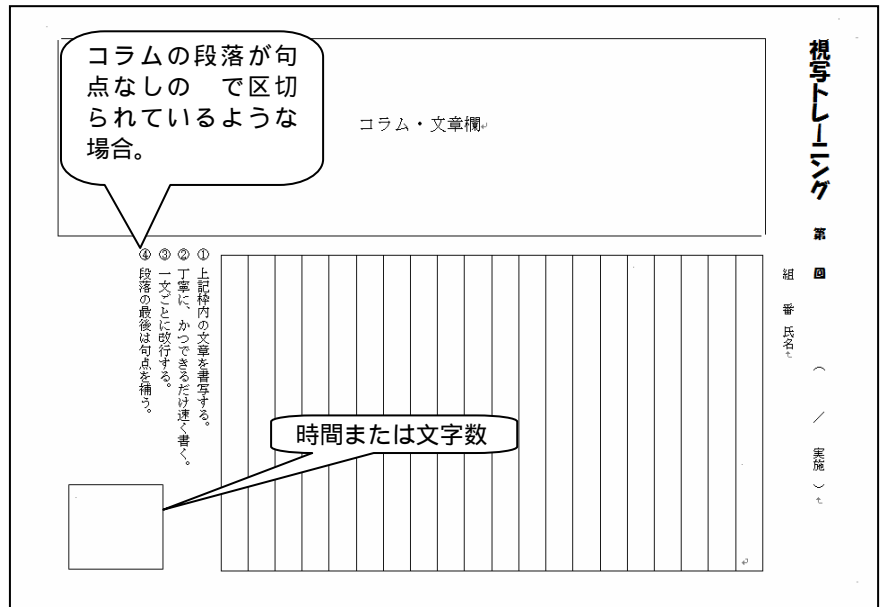


図4 視写ワークシート例

なお、「視写」をトレーニングする際のワークシート例を図4に示す。

#### おわりに

「視写」には、様々な可能性がある。一定の期間の取組でも、目に見える効果が期待できる。基礎体力や技術のない運動選手に高度なプレーばかりを求めても、負担をかけるばかりで、結局は自信や意欲を失わせることになりかねない。それと同じようなことが国語教育の上で起こっていないか、今一度見直す必要がある。「視写」への取組により、「書くこと」「読むこと」の基礎力を培い、生徒の「国語」に対する積極性を生み出すことで、活気のある国語の授業が展開されることを期待したい。